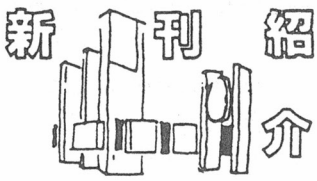
https://rodosoken.com/



全国労働組合総連合編

『組合員教科書』

相澤　與一

小生は長く大学で教えてきたが、いつも悩むのは良い教科書がないことである。教科書の有無や善し悪しで、教育や学習が大きく左右されるからである。本書は、どんぴしゃり、全労連の『組合員教科書』と名のっている。これは大変なことである。本書の課題と責任は実に大きい。執筆と編集の苦労が偲ばれる。全労連議長が巻頭文「刊行にあたって」を書き、その結びで「全労連は、今回初めて『組合員教科書』を刊行することができました」と述べているが全労連の発足が1989年11月だから、全労連として組合員教科書を出すまでに、12年余りを要した勘定になる。内部の事情にうとい筆者にはわからないが、この間、何度か教科書づくりが話題になったことであろう。しかし、全労連という日本の階級的民主的なナショナル・センターを標榜する大組織が誰でもそうだと納得し合えるような教科書を作成することは、はたから見ても、大変な難事業であるはずである。最初から完全なものなど、できるはずがない。たぶん、いろいろな注文や批評が待っているはずである。がしかし、まず第一に最初の教科書が作られなければ始まらない。この種の教科書を作ることの困難を推測できる者の一人として、本書の作成に当たられた方々にこころから、ご苦労様でした。よく頑張りましたね。おめでとうございます。と申しあげたい。

前記の挨拶文の冒頭で、「この教科書は、組合員のみなさんに最小限知っていただきたい、全労連としてのメッセージです」といわれている。だから、あらゆる問題を扱っているわけではないが、基本的なことははとんど触れられていると見てよいだろう。

その内容を紹介するのは困難なので、まず目次の章別編成を紹介しよう。

刊行にあたって
第１章　わたしたちの社会と労働者・労働組合
第２章　労働条件はどう決まるか
第３章　労働組合の活動と運営
第４章　労働組合の要求と課題
第５章　ナショナルセンター・全労連とは
おわりに

歴史を含め労働組合についての、さらにとくにその全国組織ナショナル・センター全労連についての基本的なことはもちろんのこと、それに関連して今日の嵐のような動きとそれに対する取り組みまで、広くしかも具体的に言及している。学習教科書としての目配りは周到である。学習運動に大いに役立つに違いない。それだけに、理解を深め共有するには努力も必要であろう。学習を世話するチューターも数多く必要とされるだろう。まずその要請と確保が課題となろう。そのあたりのことはお任せすることにして、内容は広範・多岐にわたり、筆者自身が一読して認識をあらたにしたことが多い。おもしろい教科書である。おもしろいと思ったことのひとつは、１章の書き出しが「わたしたちの労働は社会的に結合」という命題であり、そして最後に、グローバル経済と労働組合を論じた後で６「壮大な共同と統一をめざして」で結ばれ、終始が一貫していることである。　（学習の友社・2002年１月刊・1000円）

（あいざわ　よいち・常任理事）

唐鎌直義著

『日本の高齢者は本当にゆたかか
―転換期の社会保障を考えるため―』

江尻　尚子

小泉流「構造改革」は、「自助・自律」の名のもとに、社会保障に対する公的補助を限りなくゼロに近づけ、保険料引き上げ、給付水準を低下させることによって、国民負担を限りなく増やし、いのちまで奪う状況をつくりだしています。まさに社会保障の解体そのものです。

こうした状況のなかで、医療・福祉・介護・年金など社会保障に関する関心も高まっており、それぞ